

# 過疎地域での地域包括ケア実践に外国人専門職の参画に関する相互交流による探索的研究

成田 有吾 ●三重大学 大学院医学系研究科 看護学専攻 教授(現:名誉教授、リサーチアソシエイト)

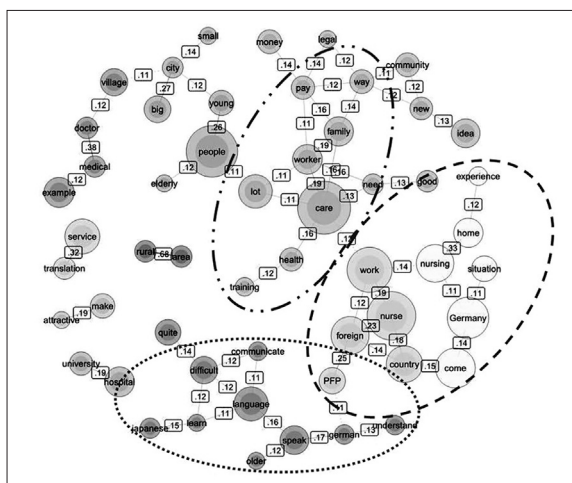


図1 インタビュー内容の共起図  
抽出語の円の大きさは出現頻度を、抽出語間の数値はJaccard係数で語の関連の強さを示す。ドイツでの外国人看護師等の導入経験が右端に破線の楕円(看護)で、中央から右上に二重破線で介護職就労者に必要な、家族とともに住み・働き、日本人と同等の賃金・地位、研修機会等の整備が、また下方には点線で言語能力や文化を含めた相互理解等の必要性が示唆された。

## 要旨

本邦の過疎地域の地域包括ケアへの外国人看護師・介護士の参画の可能性を探るため、紀南病院の協力を得て、外国人教員と学生に現地を体験させ、自国での地域ケア実践と教育の経験、外国人専門職の導入等について英語でのフォーカスグループインタビューを実施した。

今回、このうちドイツ、フライブルク、カトリック応用科学大学の教員5名と学生3名、合計8名からの内容をKH Coder®を用い検討した。対象からは、ドイツでの外国人導入の経験、本邦の地域の少子高齢化と人的資源の必要性を認識した上で、外国人の参画にあたっては、就労者が家族とともに住み・働き、日本人と同等の賃金・地位、研修機会等の整備、日本語能力や文化を含めた相互理解等の必要性が述べられた。

外国人専門職の地域包括ケアへの参画には文化的な融合が必要であり、受け入れ側(日本人)にも、仕事と休暇や家族に関する考え方などの相互理解を含め、長期的な視野での対応が求められた。日本語・文化の支援、受け入れる精神的な環境整備、日本人と外国人の協調に向けた枠組みを、本学の他領域とも協働して模索していきたい。

## 1. 背景と目的

### 過疎地に外国人看護師・介護士の可能性

本邦では、少子高齢化が急激に進行している。不足する人材に、外国人を念頭の施策が提示され始めた。一方、地域包括ケアシステムへの外国人の参画は、まだ十分に検討されていなかった。欧州等の専門職からの日本の過疎地での地域包括ケアシステムの評価はなかった。

三重大学看護学科は、過去5年、ドイツおよびタイ提携校からの研修生を受け入れ、三重県の過疎地域での医療・介護を見学・体験させてきた。紀南病院(御浜町)は、医療資源の乏しい東紀州地域での地域包括ケアを担当してきた。

今回、我々は紀南病院の協力を得て、看護学を専攻する外国人教員と学生に現地を体験させ、過疎地域での地域包括ケアに、外国人の看護師および介護士が参画する可能性を探索した。

## 2. 活動の方法

### 外国人教員・学生にインタビュー

対象はドイツ、フライブルク、カトリック応用科学大学(CUASF)看護学専攻・医療経営学専攻の教員・学生、タイ、チェンマイ大学(CMU)看護学部教員・学生とした。

方法は、研究計画書および説明書・同意書を英語で作成し、文書同意を得た。2019年度三重大学看護学科の国際交流相互訪問を利用し、本邦および提携校の地域包括ケア実践地域を訪問・地域交流等の後、対象者への英語でのフォーカスグループインタビュー(下記5項目を質問)を実施した。

①現職、自国での当該領域の実践と教育の経験、②自国での地域ケアの状況、内容と人的資源・外国人専門職の導入、③訪問地域の地域ケ

アへの外国人看護師・介護士の参画の可能性、④訪問後に自国との比較で得た感想、⑤言語の問題、以上。

インタビューは、電子機器 (MR360<sup>®</sup>, King Jim, Tokyo) を用いて録音し、英語の文字起こしをバイリンガル専門職 (看護師) に依頼した。テキスト化した内容は、メールにて確認と修正を求め最終版とした。内容分析に KH Coder<sup>®</sup> を使い、テキストの関連・頻度を検討した。本研究は紀南病院研究倫理委員会で承認された (R1, 2019年5月15日)。

### 3. 現状の成果・考察

#### 外国人看護師・介護士導入進むドイツから

対象者は、ドイツ、CUASF看護学専攻および医療経営学専攻の教員5名 (看護師1、医療ソーシャルワーカー [MSW] 2、教育学者1、経済学・経営学者1)・学生3名 (看護師2、MSW1) および、タイ、CMU看護学部教員1名 (看護師)・学生6名であった。CUASFの学生は、全員専門職として就労後に大学へ進学していた。CMUの学生に就労経験はなかった。

インタビューは、ドイツ人を対象に、2019年6月14日三重県紀宝町浅里にて、60分、5,100語、9月27日ドイツ、CUASFにて70分、5,000語、および10月30日ドイツとのスカイプ<sup>®</sup>経由で40分、3,100語を記録した。タイ人対象には5月30日にインタビューを試みたが記録が不十分で、CMU教員が225語の概要をファイルにて提出した。

語数と精度から、今回、ドイツ人対象の結果のみを検討した。KH Coder<sup>®</sup>により、13,111語が抽出され、分析において意味を持たない助詞や「think (思う)」等の語を除くと、4,253語となっ

た。異なり語数 (語の種類) は1,277種類となり、単独では意味を持たない語を除くと、1,032語となった。語の平均出現回数は「 $4.1 \pm 8.3$ 」。3回 [平均 $\pm$ 標準偏差] であった。対象者は、ドイツでの外国人導入の経験を述べ、本邦の地域の少子高齢化と人的資源の必要性を認識した上で、外国人の就労にあたっては、就労者が家族と共に住み・働き、日本人と同等の賃金・地位、研修機会等の整備、日本語能力や文化を含めた相互理解等の必要性を示唆した (共起ネットワーク) (図1)<sup>1) 2)</sup>。



フォーカスグループインタビュー。2019年6月14日、三重県紀宝町浅里、飛雪の滝キャンプ場 交流施設にて、ドイツ、フライブルク、カトリック応用科学大学からの教員と学生へ  
\*画面の日は機器の誤設定のため6月13日と表示

### 4. 今後の展望

#### 長期的視野での相互理解に向けて

外国人専門職の日本での就労には、日本語を覚えるだけではなく文化的な融合が必要である。受け入れ側 (日本人) にも、仕事と休暇や家族に関する考え方などの相互理解を含め、長期的な視野での対応が求められる<sup>1) 2)</sup>。人材が集められなければ外国人を、では短絡的である。日本語・文化の支援、受け入れる精神的な環境整備、日本人と外国人の協調に向けた枠組みを、本学の他領域とも協働して模索していきたい。

#### 【引用文献】

- 1) 吉田恵子。ドイツでの外国からの介護専門職獲得における課題と対策。地域ケアリング。2020; 22(1): 24-29
- 2) 新井康友。介護人材確保対策による外国人介護士増加に関する一考察。地域ケアリング。2019; 21(2): 75-77